

資料提供 資料

平成27年11月10日

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

屋敷裏遺跡整理担当 福田 聖

「国内最古の“金属^{こうきん}口琴”が出土」

- 羽生市屋敷裏（やしきうら）遺跡 -

提供主体 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県熊谷市船木台4-4-1

調査遺跡 埼玉県羽生市名613-1他所在の屋敷裏遺跡

調査期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
平成25年10月1日～平成26年3月25日

調査担当者 調査部整理第一課 福田 聖

調査委託者 国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所

調査の要因 首都圏氾濫区域堤防強化対策

発表内容

羽生市屋敷裏遺跡において平安時代の竪穴住居跡から出土した鉄製品が、口琴という楽器であることが判明した。遺跡から出土した口琴としては国内3例目である。いずれも10世紀前半のもので、年代がはっきりしている金属製の口琴としては世界でも最古の例となる。

口琴は、枠の間に作りだされた薄板状の「振動弁」を、指ではじいたり紐で引っ張ったりして振動させ、その音を人間の口腔に共鳴させて大きく鳴り響かせる楽器である。東南アジア・南アジア・シベリア・中央アジア・ヨーロッパ各地等、ユーラシア大陸全域に分布し、大航海時代以降は交易品として、アメリカ大陸をはじめ世界中に広まった。

素材を基準にすると、①竹・木・骨・真鍮などの薄板の一部に切り込みを入れて振動弁にするものと、②金属製の枠の中央に、別に造った振動弁を取り付けるものの二種類に分けることができる。実際には、楽器の構造が分類の決め手であり、素材は決定的な相違点ではないが、便宜的に前者を「竹口琴」、後者を「金属口琴」と呼んで区別する。

口琴は現在でも世界中で使われるポピュラーな楽器である。日本国内では、北海道のアイヌ民族が伝統的に①の竹製口琴「ムックリ」を使用している。また、江戸時代文政期の文献に、②の金属口琴「びやぼん」が本州以南で大流行し、後に幕府に禁止されたといったという記載がある。伝統としては、明治期に一度途絶えてしまっているが、現在では口琴を使用する音楽家も少しずつ増えてきている。また、国内における口琴製作者も何名か

登場してきており、その技術は世界中の口琴奏者から、優れたものとして認められている。

遺跡から発掘された口琴としては、さいたま市の氷川神社東遺跡で2例の出土が知られており、屋敷裏遺跡の口琴は国内で3例目の発見となる。氷川神社東遺跡出土例は平安時代の10世紀前半のものとしてされており、屋敷裏遺跡出土例は同時に出土した土器の型式から10世紀前半に位置づけられるものの、同時期かやや先行する可能性がある。

日本口琴協会代表で東京音楽大学民族音楽研究所社会人講座講師の直川礼緒（ただがわれお）氏によると、国外で発掘された金属口琴のうち、年代のはっきりしているものとしては、ドイツとスイスで発掘された1200年頃の2例があり、ヨーロッパには11～13世紀にかけてアジアから伝わったと考えられている。このため、埼玉県内から発見された3例の口琴は、現時点で世界最古の金属口琴となる。他方、「竹口琴」の仲間である、骨製の薄板状のものは、中国内モンゴル自治区の夏家店上層文化からの出土品（紀元前8～5世紀）が最古であり、モンゴル国トゥブ県モリントルゴイ遺跡からの出土品（紀元前3～1世紀）がこれに続く。

屋敷裏遺跡の口琴は、断面正方形の鉄製角棒を曲げた枠の内側に、やはり鉄製（おそらく鋼製）の細長い振動弁を取り付けている。枠は環を描く持ち手と、2本平行の腕からなっており、また、この枠は、成形の際に正方形の断面の対角線が水平方向を向くように、斜め45度に傾けた状態で曲げられている。また、振動弁には、断面が円弧状（いわゆる蒲鉾型）になるようにエッジが形づくられている。

こうした特徴は、現在世界各地で使われている金属口琴と共通しており、この金属製品が口琴であると判断する決め手となった。但し、現代の金属口琴のほとんどが全長11cm未満であるのに対し、14.8cmと非常に大型であり、先に発掘された氷川神社東遺跡例（いずれも12cm強）と比べても、さらにひとまわり大きい。

平安時代の口琴については文献記録がまったく残っていないため、この口琴を誰がどのように使っていたかは不明である。

アジアで金属口琴が発掘されることは非常に稀で、日本の3例を除けば年代もはっきりしておらず、平安時代の日本に口琴がどのような経路でもたらされたのかは不明である。但し、樺太アイヌの資料の中に「カニムフクナ」などと呼ばれる金属製の口琴が存在し、ロシア連邦のサハ共和国をはじめとする北東アジアは現在も口琴が盛んに使われる地域であること、サハリンのニヴフ民族や、アムール川／黒龍江沿いのツングース語系の諸民族にも同様の金属製口琴が見られること、現在の中国東北部にあった渤海とのあいだで奈良・平安時代を通じて盛んに交易が行われていたことなどから、北アジアに起源を持つものである可能性が高い。

なお、発見された口琴は、平成27年11月14日（土）に、熊谷市の埼玉県文化財収蔵施設で開催する「まいぶんフェスタ」で公開する。「まいぶんフェスタ」の要項は別紙のとおりである。

また11月16日（月）から19日（木）まで、同所で特別展示を行う予定である。

[遺跡の概要]

屋敷裏遺跡は、縄文時代から江戸時代にいたる複合遺跡で、おもに古墳時代、平安時代の集落遺跡である。

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団では、国土交通省の首都圏氾濫区域堤防強化対策工事に先立って、平成 23・25 年に発掘調査を実施し、平成 26 年から調査報告書作成事業を実施している。

発掘調査では竪穴住居跡 100 軒、掘立柱建物跡 3 棟、方形周溝墓 1 基、円形周溝状遺構 1 基、井戸跡 19 基、土壇 93 基、溝跡 15 条、畠跡 6 箇所、ピット群 11 箇所、ピット多数、土器集中 3 箇所が発見された。

平安時代では、住居跡 26 軒、掘立柱建物跡 1 棟、土壇 12 基、井戸跡 6 基、畠跡 4 箇所が発見された。

口琴が出土した第 45 号住居跡は 4.05×2.40m の縦長の長方形で、北側にカマドが設けられている。口琴は平安時代の須恵器坏、ロクロ土師器坏、甕、土師器甕の破片とともに床面近くから出土している。本住居跡の時期は 10 世紀前半であり、口琴もその年代と考えられる。